

早稲田大学大学院教育学研究科紀要 第二十四号 二〇一四年三月

『大東世語』「術解」篇注釈稿

堀 誠・井上 翠・齋藤 彰子・趙 倩倩
仲川 泰博・任 清梅・呂 天雯

〔凡例〕

一、本稿は、服部南郭『大東世語』「術解」篇の本文と原注に関する注釈である。

一、注釈は、早稲田大学大学院教育学研究科二〇一二年度科目「国文学演習」（堀 誠担当）の受講生（井上翠・齋藤彰子・趙倩倩・仲川泰博・任清梅・呂天雯）が講読担当話の発表資料に基づいて原稿化した。

一、底本は、早稲田大学図書館蔵本『大東世語』（寛延三年（一七五〇）刊）に依り、また典拠に関しては同館蔵本『大東世語考』（方寸菴漆鍋稿、寛延四年（一七五二）序）を参考にした。

一、「術解」篇の都合七話を、「術解1」のように順次表記した。

一、注釈は本文の「書き下し文」・「訳文」、原注の「書き下し文」・「訳文」、および「語釈」、「典拠」から構成される。

『大東世語』「術解」篇注釈稿（堀・井上・齋藤・趙・仲川・任・呂

一、「書き下し文」は、原則として底本の訓点を尊重しつつ、適宜これを改めた。

〔術解1〕

藤戸部①好鷹。吏部王②特詣「宇治宅」。乞「求一鷹」。乃受而還。途遇「鳥數試」。頗凡也。王自「中路」再造。更請「他鷹」。戸部乃臂「一鷹」出曰。本欲「獻」此。恐不「中」用。今唯所「試」。王喜。乃在「歸路」。見「鳥正一放」之。便入「雲去」。世謂此鷹。五十丈内遇「鳥必擊」之。盖亦知「掣者凡」而颺去。

〔書き下し文〕

藤戸部 鷹を好む。吏部王特に宇治の宅に詣る。一の鷹を乞ひ求む。乃ち受けて還る。途に鳥に遇ひて數しば試みるに、頗る凡なり。王 中路自り再び造る。更に他の鷹を請ふ。戸部乃ち一の鷹を臂にし出でて曰く、「本より此を獻ぜんと欲す。恐らくは用に中らずと。

今唯だ試みる所のみなり」と。王喜ぶ。乃ち歸路に在りて、鳥を見て正に一たび之を放てば、便ち雲に入りて去る。世謂ふ、「此の鷹、五十丈の内　鳥に遇へば必ず之を撃つ。盖し亦た掣する者の凡を知りて颺がり去る」と。

〔訳文〕

民部卿の藤原忠文は鷹を好んだ。式部卿の重明はわざわざ忠文の宇治にある住まいを訪ねて、鷹をもらおうとした。鷹をもらい受けて帰ったが、途中で鳥に出会ったので、何度か試してみたが、とても平凡な鷹であった。重明は途中から再び引き返し、他の鷹を乞い求めた。そこで忠文は肘に鷹を止まらせて出てきて言うことには、「もとよりこの鷹をさしあげようと思いましたが、恐らくお役には立たないでしょう。今はこの鷹をお試ください」と。重明はたいへん喜んでいた。帰り道に鳥を見つけて、ひとたび鷹を放つと、そのまま雲間に飛んでいつてしまった。世間の人は「この鷹は五十丈（一五一・五メートル）範囲内で鳥にあつたら必ず捕まえてくる。思うに鷹もその制御する人の凡才を見抜いたから飛び去ったのであろう」といった。

〔原注〕

①忠文。

②重明。

〔書き下し文〕

①忠文なり。

②重明なり。

〔訳文〕

①忠文である。

②重明である。

〔語釈〕

藤戸部　藤原忠文。八七三～九四七。平安中期の公卿。民部卿（戸部は民部省の唐名）。正四位下。天慶三年（九四〇）征東大將軍として平将門の乱の平定に下向したが、途中将門の誅されたのを聞き京に帰った。翌年、征西將軍に任じられ、藤原純友の征伐に従っている。没後に正三位が贈られ、宇治民部卿と称された。

吏部王　重明親王。九〇六～九五四。醍醐天皇の第四皇子。官位は三品・式部卿。吏部（式部卿の唐名）王とも呼ばれ、日記『吏部王記』は十世紀初めの貴族社会を知るうえでの貴重な資料。

宇治　京都府南部に位置する。平安時代から貴族の別荘地である。

丈　長さの単位。一丈は約三・〇三メートル。

颺　ここでは、鳥などが飛び上がる意。

〔典拠〕

『江談抄』第三十二話「忠文民部卿、鷹を好む事」

『今昔物語集』卷第二十九第三十四話「民部卿忠文鷹知本主語」

（趙　倩倩）

〔術解2〕

源羽州齊頼①。武人。好_レ獵愛_レ鷹。多養_二飼之_一。老後失_レ明。不_レ能_二復自掣_一。猶居_二家日居_二臂上_一。手摸爲_二樂_一。客携_二信鷹_一來。詐云。頃得_二自_二西州_一。齊頼欣然臥起。乃攝_二拳上_一。摸_二其毛骨_一。良久。曰。是信山腹白巢鷹爾。不幸喪_レ明。殆將_レ見_レ欺。客乃驚服。

〔書き下し文〕

源羽州齊頼。武人なり。獵を好みて鷹を愛す。多く之を養飼す。老後明を失し、復た自ら掣すること能はず。猶は家に居りて日に臂上に居へ、手摸し樂しむと爲す。客 信鷹を携へ来たりて、詐りて云ふ、「頃西州自り得たり」と。齊頼欣然として臥より起ち、乃ち拳上に攝し、其の毛骨を摸して、良久しくして曰く、「是れ信山の腹白巢の鷹のみ。不幸にして明を喪ふ。殆ど將に欺かれんとす」と。客乃ち驚き服す。

〔訳文〕

出羽守源齊頼は武将であつた。狩を好んで鷹が好きであり、多くの鷹を養つていた。老後になつて失明し、自分で鷹をあやつることができなくなつた。それでも、家に居る時は毎日鷹を肘の上に据えて、手で撫でて樂しむとした。ある人が信濃の鷹を携えて来て、騙して「近頃西国から手に入れたのです」と言つた。齊頼はとても喜んで、臥し所から起き上がり、その鷹を拳の上に乗せて、その毛骨を撫でて、しばらくすると「信濃腹白という種類の鷹です。私は不幸にも失明してし

まい、もう少しで騙されるところでした」と言つた。それで、その人は驚き敬服した。

〔原注〕

①陸奥守滿政之孫、駿河守忠隆之子。出羽守。

〔書き下し文〕

①陸奥守滿政の孫にして、駿河守忠隆の子なり。出羽守なり。

〔訳文〕

①陸奥守滿政の孫で、駿河守忠隆の子である。出羽守であつた。

〔語釈〕

源齊頼 生没年未詳。平安時代中期の武将・官人・鷹匠。清和源氏滿政流。駿河守忠隆の長男。藏人、檢非違使、出羽守などを歴して、優れた鷹飼であつたことが知られる。

源滿政 生没年未詳。平安中期の武将。父は賜姓源氏の経基。滿仲の弟。正暦五年（九九四）朝廷派遣の盜賊探索の一員に加わつており、「武勇の人」と呼ばれている。武藏守、陸奥守などを務めていた。

源忠隆 生没年不詳。平安中期の武士・官人。源滿政の次男。官位は正五位下、檢非違使、左衛門尉、藏人、駿河守。出羽国の略称。

羽州 西国。近畿から西の地方。中国、四国、九州地方。信山腹白巢鷹 「信山」は信濃。「腹白」は腹部が白い鷹。信濃の腹白の巢で育つた鷹。

〔典故〕

『古事談』第三一八話「源齊賴、ヨク鷹ヲ知りタル事」。

（呂 天雲）

〔術解3〕

藤致忠①頗曉「天文」②。偶於「厠向人説」天事。忽有「射」焉者。箭中「柱」。致忠驚曰。吾過矣。穢處談「天」。故「榮惑射」吾爾。唯今年有「木星助」。故止「柱」而已。

〔書き下し文〕

藤致忠頗る天文を曉る。偶たま厠に於いて人に向かひて天事を説く。忽ち焉を射る者有り。箭 柱に中る。致忠驚きて曰く、「吾過てり。穢處に天を談ず。故に榮惑 吾を射るのみ。唯だ今年 木星の助け有り。故に柱に止まるのみ」と。

〔訳文〕

藤原致忠は天文に非常に通曉していた。彼はたまたま厠で人に向かつて天文の事を語った。すると、突然そこに矢を射こんだ者がいた。その矢は柱に的中した。致忠は驚いて言うことには、「私は間違いを犯した。不浄な場所で天文を語ったので、榮惑星（火星）が私を射たのだ。ただ今年は、木星の助けがあるため、柱に当たっただけで済んだのだ」と。

〔原注〕

①大納言元方之子。右京大夫左馬頭。

②天曆時。有詔問天文博士保憲。時致忠作郎。以中使往反。

〔書き下し文〕

①大納言元方の子なり。右京大夫、左馬頭なり。

②天曆の時、詔有りて天文博士保憲に問ふ。時に致忠は郎と作る。中使を以て往反す。

〔訳文〕

①致忠は大納言元方の息子である。職は右京大夫、左馬頭である。
②村上天皇の天曆の時に、詔が出されて、天文博士賀茂保憲に尋ねることがある。その時致忠が蔵人の役人であり、彼は勅使として天皇と保憲との間を往来していた。

〔語釈〕

致忠 藤原致忠。生没年不詳。宗忠とも。大納言元方の子。蔵人・備後守・左馬頭を歴任し従四位下。永延二年（九八八）子の保輔が強盜の首領として逮捕されたとき拘禁され、長保元年（九九九）橘惟貞とその郎等殺害により佐渡に流された。

榮惑 榮惑星。火星の異称。『史記』『天官書』には「榮惑、行を失ふ

とは、是なり。出づれば則ち兵有り。入れば則ち兵散ず。（中略）

榮惑は、勃乱・残賊・疾・喪・飢・兵と為す。」とある。

木星 歳星ともいう。五星の一つ。『史記』『天官書』には「木星、土と合ふときは、内乱・饑と為す。主、戦を用ふる勿れ、敗る。」とある。

元方 藤原元方。八八八〜九五三。平安時代中期の公卿。父は藤原

菅根。天慶二年（九三九）八月參議となり、同五年三月には、

從三位・中納言となり、天曆五年（九五二）正月正三位・大納言に進んだ。元方の娘祐姫は村上天皇との間に広平親王を儲けたが、藤原師輔の娘安子との間に生まれた憲平親王（冷泉天皇）が立太子したことから、悲嘆のうちに没した元方は、怨霊となつて冷泉以後歴代の天皇に祟つたとされる。

右京大夫 右京職の長官。正五位相当。

左馬頭 左馬寮の長官。從五位上相当。

天曆 年号。平安時代、村上天皇の代の年号。九四七年四月二十二日

～九五七年十月二十七日。

保憲 賀茂保憲。九一七～九七七。平安中期の陰陽家。曆博士、陰陽

頭兼天文博士。子光榮に曆道、安倍晴明に天文道を伝えた。著

に「曆林」などある。

郎 中国の官の名。侍郎、員外郎、尚書郎などの総称。ここでは、

致忠が勤めた藏人のことを言うのであろう。

中使 天皇の派遣する使者。勅使。

〔典拠〕

『江談抄』第三―第三十六話「癸惑星、備後守致忠を射る事」

（任 清梅）

〔術解4〕

寛和帝逃幸「花山」。時夜潛出「宮中」。侍從二人而已。人無「知者」。路過「安晴明宅」。晴明適避「暑於庭」。忽拍「手獨駭曰。變變。仰見」緯象」。天子避「位」。何哉。帝行聞而走。晴明便入奏「急變」。於是宮中始知「帝不_レ在_①」。

〔書き下し文〕

寛和帝逃れて花山に幸す。時に夜潛かに宮中を出づるに、侍從二人のみ。人知る者無し。路に安晴明が宅を過ぐ。晴明適に暑を庭に避く。忽ち手を拍ち獨り駭きて曰く、「變變たり。仰ぎて緯象を見るに、天子位を避くるは、何ぞや」と。帝行ゆく聞きて走る。晴明便ち入りて急變を奏す。是に於いて宮中始めて帝の在らざることを知る。

〔訳文〕

寛和帝（花山天皇）は内裏から逃れて花山に行かれた。ちょうど夜分にこつそりと宮中を抜け出して、侍從は二人だけであった。これを知る者はいなかった。道中、安倍晴明の家を通り過ぎた。晴明はちょうど暑さを逃れて庭で涼んでいた。突然手を打って独り驚いて、「異変がある。天体の動きを仰ぎ見ると、天子が皇位を退くとある。これは何事であろうか」と言った。帝は通りながらこれを聞いて先を急いだ。晴明はすぐさま宮中に参内して急變を奏上した。そこで宮中では帝がいらっしゃらないことをようやく知った。

〔原注〕

①寛和帝少即位。俄而所愛幸弘徽妃薨。帝不勝悲哀。至致迷罔。遂懷脱屣之志。偶見藤道兼所持扇。有題云。妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者。帝乃循覽悚然。道兼因說理無常。助其哀情。帝益決遁志。無幾。帝與道兼謀。欲乘夜潛幸花山。將出。其夕月色殊明。帝難其揭焉。有猶豫之色。道兼奏曰。璽劔已奉東宮矣。先是道兼密送東宮。故云爾。頃之。雲翳月光。帝曰。吾志成矣。遂出。已而遣亡妃書有密情者。欲反入取之。道兼詐泣曰。如許。恐有「事障」。帝亦以其不可中止。遂遁。道兼與僧一人從焉。其明藤義懷。藤惟成。奔到行在。共同棄世。道兼詐泣曰。已奉聖約。願暫歸。面辭父母。而後來給事薪水。乃去不來。便仕後帝。數月陞進。後寛和上皇。懊悔其率爾。又知道兼詐謫。而憤怨焉。時一條帝在東宮。是前帝圓融太后所生。道兼者太后兄弟之子也。實欲東宮早得其所。故誘成上皇遜焉。義懷是九條公孫。謙德公子。其姊爲寛和帝母后。外戚門地。已居要路。從帝入釋。時人且謂。志不可保。遂不再出。確終其守。惟成者雅材子。自永觀末。國政無紀。寛和即位爲辨。朝政漸正。惟成之力爲多。二人遁世。世頗惜焉。而益疾栗田公險黠云。

〔書き下し文〕

寛和帝少くして即位す。俄かにして愛幸する所の弘徽妃薨す。帝悲

哀に勝へず、迷罔を致すに至り、遂に脱屣の志を懷く。偶たま藤道兼の持する所の扇を見るに、題有りて云く、「妻子 珍寶及び王位、命終る時に臨みて随はざる者なり」と。帝乃ち覽るに循ひて悚然とす。道兼因りて理の常無きことを説く。其の哀情を助く。帝益ます遁志を決す。幾ばくも無くして、帝と道兼と謀りて、夜に乗じて潜かに花山に幸せんと欲す。將に出でんとするに、其の夕 月色殊に明らかにして、帝其の掲焉を難じ、猶豫の色有り。道兼奏して曰く、「璽劔已に東宮に奉れり」と。是に先んじて道兼密かに東宮に送る。故に爾か云ふ。頃之して、雲 月光を翳ふ。帝曰く、「吾が志成れり」と。遂に出づ。已にして亡妃の書の密情有る者を遣せば、反り入りて之を取らんと欲す。道兼詐り泣きて曰く、「如し許さは恐るらくは事の障ること有らん」と。帝も亦た其の中止すべからざるを以て、遂に通る。道兼と僧一人と焉に従ふ。其の明 藤義懷、藤惟成、奔りて行在に到り、共に同に世を棄つ。道兼詐り泣きて曰く、「已に聖約を奉れり。願はくは暫く歸り、父母に面辭せん。而る後に來りて薪水に給事せん」と。乃ち去りて來らず。便ち後の帝に仕へ、數月して陞進す。後に寛和上皇、其の率爾なるを懊悔し、又た道兼の詐謫するを知りて、而して憤怨たり。時に一條帝 東宮に在り。是れ前の帝 圓融太后の生む所なり。道兼は太后の兄弟の子なり。實に東宮の早く其の所を得んことを欲す。故に誘ひて上皇と成し遜らしめたり。義懷是れ九條公の孫なり。謙德公の子なり。其の姊 寛和帝の母后と爲り、外戚の門地、已に要路に居るも、帝に従ひて釋

に入る。時の人且つ謂らく、「志保つべからず」と。遂に再び出でず、確として其の守に終ふ。惟成は雅材の子なり。永観の末自り、國政 紀無し。寛和即位するに辨と爲すに、朝政漸く正し。惟成の力多きを爲す。二人 世を遁れ、世頗る惜しむ。而して益ます栗田公の險黠を疾むと云へり。

〔訳文〕

寛和帝は若くして即位した。やがて寵愛していた弘徽妃が亡くなった。帝は悲しみのあまり心が乱れ、かくして退位の意思を懷いた。偶然藤原道兼が持つ扇を見ると、題が書きつけてあり、「妻子や珍しい宝や王位は、命が終わる時には随従できないものである」と。帝はこの題を見るにつれて身が竦む思いがした。そこで道兼は道理を一段と強く説き、その哀しみを助長した。帝はますます遁世の思いを固めた。程なくして、帝と道兼は計画して、夜の闇に乗じてこっそりと花山に行こうとなさった。まさに出発しようとしたとき、夜の月はとても明るかった。帝は月が高く昇っていることをはばかり、ためらう様子であった。道兼が奏上して言うことには、「玉璽と宝剣は已に東宮に奉獻しました」と。これより先のこと、道兼は密かに東宮に送っていた。それ故、このように言った。しばらくして雲が月明かりを覆った。帝は、「私の出家への志が成就する」と言った。亡き妃の深い思いのこもった手紙を忘れてきたので、引き返してこれを取ろうとした。道兼は嘘泣きして、「もし帰ることをお許し申し上げたら、おそらく支障が出るでしょう」と言った。

帝もまた計画を中止すべきではないと思い、そのまま世を遁れた。道兼と僧一人が従った。その夜明けに、藤原義懷と藤原惟成が帝のもとに駆けつけ、一緒に出家した。道兼が嘘泣きして言うことには、「すでにお約束を成し遂げました。どうか少しの間帰って、父母に会って別れを告げたく存じます。その後戻りましてお側にお仕えます」と。ところが行ったきり帰って来なかった。そのまま次の帝に仕え、数か月で昇進した。後に寛和上皇はにわかに出家したことを悔いて、また道兼の嘘偽りを知って、憤り怨んだ。その時、一条天皇は東宮であった。円融天皇の皇太后が生んだ子であり、道兼は皇太后の兄弟であった。実のところ、東宮が早く帝位を得ることを望んでいた。そのため花山天皇を誘って上皇とし帝位を譲らせた。義懷は九条公（師輔）の孫であり、謙徳公（伊尹）の子である。その姉は寛和帝の母后であり、外戚の家柄で権勢のある地位に就いていたが、帝に従って仏道に入った。当時の人々が「（外戚としての）志を保つことはできない」と思ったのである。かくして再び俗世には帰らず、しっかりとその操を守って生涯を終えた。惟成は雅材の子である。永観年間の末から國政には秩序が無かった。寛和帝は即位すると惟成を権左中弁に叙して、朝政は次第に正された。惟成の尽力が多くを占めた。義懷と惟成の二人が出家したことを世の人々は非常に惜しんだ。そしてますます栗田公（道兼）が陰險で狡猾なことを憎んだという。

〔語釈〕

寛和帝 花山天皇。九六八～一〇〇九。冷泉天皇の皇子。母は摂政藤原伊尹の女懷子。永観二年（九八四）即位するが、藤原兼家らの圧迫と陰謀により寛和二年（九八六）花山寺に入り出家、退位した。

花山 京都市山科区にある地。花山寺（元慶寺）がある。

安晴明 安倍晴明。九二一～一〇〇五。陰陽家。土御門家の祖。天文博士、主計権助などを歴任し、長保三年（一〇〇二）従四位下、同四年大膳大夫、寛弘元年（一〇〇四）左京権大夫。著書に『占事略決』。

弘徽妃 藤原低子。九六九～九八五。藤原為光の女。永観二年（九八四）花山天皇の後宮に入り女御となり弘徽殿女御と呼ばれる。子を身ごもるも出産を待たず没した。

道兼 藤原道兼。九六一～九九五。太政大臣兼家の子。天延三年（九七五）十五歳で従五位下に叙された。寛和二年（九八六）一条天皇が即位し父兼家が摂政になると、同年のうちに参議を経て正三位権大納言、正暦二年（九九二）内大臣、同五年右大臣、長徳元年（九九五）関白となるが、わずか十日余りで没し「七日関白」と呼ばれた。栗田殿と称される。

藤義懷 藤原義懷。九五七～一〇〇八。藤原伊尹の子。天禄三年（九七二）従五位下に叙された。永観二年（九八四）妹懷子の皇子である花山天皇が即位すると蔵人頭、右中将となり三カ月

足らずで従三位、正三位と昇進。寛和元年（九八五）九月参議、十一月従二位、十二月権中納言に昇るが、天皇に随い出家し、比叡山に籠った。

藤惟成 藤原惟成。九五三～九八九。藤原雅材の子。花山天皇の側近。正五位で蔵人、権左中弁、左衛門権佐、民部卿大輔となる。中納言義懷とともに朝政を左右した。天皇に随い出家した。詩歌に優れ、『類聚問題抄』『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』などに収められている。家集『惟成弁集』がある。

九條公 藤原師輔。九〇八～九六〇。関白忠平の子。延長元年（九二三）従五位下に叙され、諸官を経て承平五年（九三五）参議、天慶元年（九三八）権中納言、同五年（九四七）右大臣となる。極位は正二位。源高明と学問的交流があり、忠平から継承した儀式作法を集大成した『九条年中行事』をのこす。

謙徳公 藤原伊尹。九二四～九七二。平安時代中期の公卿・摂政。藤原師輔の長男。『後撰和歌集』撰者の一人。和歌所別当となり、参議・右大臣を歴任。のち摂政となり、外戚として絶大な権力を握った。贈正一位。三河国に封ぜられた。諡号は謙徳公。

雅材 藤原雅材。生没年未詳。藤原経臣の子。応和二年（九六二）式部少丞となり、のち従五位上右少弁に至る。『扶桑集』『本朝文粹』などに詩をのこす。

永観 年号。九八三～九八五。円融天皇、花山天皇の治世に当たる。栗田公 藤原道兼の称。

變變 普通と異なること。異変。

緯象 天文。

迷罔 心が乱れて道理が分からないこと。

脱屣 帝が執着なく位を去ること。

悚然 ぞつとして立ち竦むさま。

掲焉 高くあがるさま。

猶豫 ためらってなかなか決断しないこと。

行在 天子巡幸中の假御所、假宮。

給事 貴人の側に仕えること。

薪水 炊事のこと。ここでは花山院の身のお世話のこと。

率爾 にわかに。慌しいさま。

詐譎 ずるい嘘。いつわり。

要路 権力、威勢のある役、地位。

紀 風紀、秩序。

陰黠 「陰」はよこしま、「黠」は悪賢い、悪賢い者。

〔典拠〕

『大鏡』第一卷「花山院」。

『栄華物語』卷第二「花山たづぬる中納言」。

『古今著聞集』卷第十三「哀傷」「花山院御出家の事付けたり義懷惟成並びに弘徽殿粟田関白の事」(第四七二話)。

(仲川 泰博)

〔術解5〕

九條相國①善相。未_レ達時。偶_レ鏡_レ掖庭井。自_レ鑑_レ其面。覺_レ有_レ公相_一。喜而歸。取_レ鏡自見。無_レ復前相_一。試行再_レ鏡_レ井如初。歎曰。鏡近井遠。吾拜_レ相自當_レ遠爾。後果如_レ其言_一。

〔書き下し文〕

九條相國善く相す。未だ達せざる時、偶たま掖庭の井を窺ふ。自ら其の面を鑑みるに、公の相有ることを覺る。喜びて歸る。鏡を取りて自ら見るに、復た前の相無し。試みに行きて再び井を窺ふに初めの如し。歎じて曰はく、「鏡は近く井は遠し。吾 相に拜する自ら當に遠かるべきのみ」と。後に果して其の言の如し。

〔訳文〕

九条太政大臣の藤原信長は觀相が得意だった。まだ栄達する前のこと、たまたま後宮の井戸の中をのぞいて見た。自分でその顔を映し見ると、関白の相があることに気付いて、喜んで帰った。鏡を取り出して自ら見ると、さきほどの関白の相はあらわれなかった。試しに宮中に行つて再び井戸をのぞき見ると、最初のようにであった。そこで歎いて言うことには、「鏡は身近にあり井戸は遠くにある。私が関白(宰相)を拜命するのは、自ずと遠いことになるでしょう」と。のちにやはりその言葉の通りになった。

〔原注〕

①信長。御堂公之孫。相國教通之子。至_二大政大臣_一。號曰九條公。

〔書き下し文〕

①信長なり。御堂公の孫、相國教通の子なり。大政大臣に至り、號して曰く、「九條公」と。

〔訳文〕

①藤原信長である。御堂公藤原道長の孫であり、関白 藤原教通の子である。太政大臣になり、九条公とよばれた。

〔語釈〕

九條相國 藤原信長。一〇二二～一〇九四。藤原教通の三男。母は藤原公任の娘。内大臣をへて承暦四年（一〇八〇）太政大臣となる。九条烏丸に邸宅を構えたので、九条太政大臣と称された。また邸地に城興寺を建立。城興寺殿とよばれる。父である関白教通の没後、関白の座をめぐって藤原師実と競いあったという。

御堂公 藤原道長。九六六～一〇二七。藤原兼家の子。母は藤原中正の娘時姫。兄の道隆・道兼の死後、内覧・氏長者・右大臣となる。道隆の子の伊周・隆家を失脚させ、娘彰子・妍子・威子・嬉子・盛子を入内させて政権を独占。藤原氏摂関政治の全盛期を築く。関白になった事実はないが、御堂関白と称され、日記に『御堂関白記』がある。

教通 藤原教通。九九六～一〇七五。大二条関白。藤原道長の子。母は左大臣源雅信の娘倫子。治暦四年（一〇六八）後冷泉天皇への娘の歎子の立后を契機に、兄頼通から関白を譲られる。そ

の後、後三条天皇の親政に伴い実権は低下。死後は、兄頼通の嫡男 師実が関白となった。故実に優れており、日記『二東記』を残している。

掖庭 宮中の正殿の脇にあつて、皇妃、宮女が住んでいる御殿。後宮。

〔典拠〕

『古今著聞集』卷第七「術道」第九「九條大相國伊通淺位の時井底を望みて丞相の相を見る事」（第二九七話）。

〔備考〕

典拠では「九條大相國」を、藤原信長ではなく、藤原伊通（一〇九三～一一六五）のこととしている。

（齋藤 彰子）

〔術解6〕

亞相藤道明①。未^レ達時。與^二其婦^一微服。密各到^レ市買^レ物。有^二一嫗^一。先見^二其婦狀貌^一曰。君相必當^レ爲^二亞相夫人^一。尋見^二道明^一。指曰。亦配^二此人貴相^一也。

〔書き下し文〕

亞相 藤道明、未だ達せざる時、其の婦と微服して、密に各^{おの}の市に到りて物を買ふ。一嫗有り、先づ其の婦の狀貌を見て曰く、「君が相必ず當に亞相の夫人と爲るべし」と。尋いで道明を見るに、指して曰く、「亦た此の人の貴相に配するなり」と。

〔訳文〕

大納言 藤原道明は、まだ栄達する前の頃、妻とともに身なりをやつして、密かにそれぞれ市へ行って買い物をした。ある老婦がいて、まず妻の相貌を見て、「あなたの人相は、きっと大納言の夫人となるだろう」と言った。やがて道明を見ると、指を差して「（あの婦人の相はこの方の貴人の相につりあっている）」と言った。

〔原注〕

①字慶。相摸守高仁之孫。保蔭之子。官左大將大納言。

〔書き下し文〕

①字は慶なり。相摸守高仁の孫、保蔭の子なり。官は左大將大納言なり。

〔訳文〕

①字は慶である。相摸守高仁の孫で、保蔭の子である。官職は左大將大納言である。

〔語釈〕

亞相 大納言の異称。

藤原道明 藤原道明。八五六〜九二〇。平安時代前期の公卿。藤原保蔭

の長男。母は橘良基の娘。没時は正三位、大納言兼民部卿。「延

喜式」の編集に加わった。

達 すすむ。身頭れ志成ること。

婦 妻。

微服 服装を変じて人目に触れないようにする。しのびの姿。

『大東世語』『術解』篇注釈稿（堀・井上・齋藤・趙・仲川・任・呂）

嫗 ばば、老婦。

相貌 顔かたち、容貌。

相 人相。

尋 ついで。

配 つり合う、そぐう、並ぶ。

相摸 東海道十五か国の一つ。関東平野の南西に位置する。現在の神

奈川県の大部分にあたる。

高仁 藤原貞嗣の息。

保蔭 藤原高仁の息。

〔典拠〕

『江談抄』第三―第二十三「大納言道明市に到りて物を買ふ事」。

（井上 翠）

〔術解7〕

有_レ人詣_二太醫丹雅忠_一。主人方待_二他客_一。出在_二堂側_一。便接見_二其人_一。少頃。來乞_レ診者。相尋入_レ門。主人遙望_二其面_一。顧對_二其人_一。歷_二指病者_一。暗言_二其所_レ患_一。及_二皆坐_一陳_二其惡_一。無_レ不_二悉中_一。俄頃所待客至。是安晴明子吉平①。主人爲設_二杯酒_一。先舉_レ杯未飲。吉平曰。急_レ之。地今且_レ震。覆杯可_レ惜。主人以爲_レ戲。從容未_レ飲。俄而地震。杯酒果覆。並是妙術。其人大驚以語_レ世。

〔書き下し文〕

人有_レり太醫の丹雅忠に詣る。主人方に他客を待つ。出でて堂側に在り。

便ち其の人に接見す。少頃くして、來りて診を乞ふ者、相ひ尋ひで門に入る。主人遙かに其の面を望む。顧みて其の人に對し、病者を歷指して、暗に其の患ふ所を言ふ。皆坐して其の惡を陳するに及びて、悉く中らざることを無し。俄頃に待つ所の客至る。是れ 安晴明の子 吉平なり。主人爲に杯酒を設く。先づ杯を舉げて未だ飲まず。吉平曰く、「之を急にせよ。地 今且に震はんとす。覆杯惜しむ可し」と。主人以って戲と爲す。從容にして未だ飲まず。俄にして地震す。杯酒果して覆す。並びに是れ妙術なり。其の人大ひに驚きて以って世に語る。

〔訳文〕

ある人が太医の丹波雅忠のもとを訪ねた。主人はちょうど他の客（吉平）を待つて、客間のあたりに出ていた。そこで、そのままその人に面会した。しばらくすると、診察にくる人が次々と入ってきた。主人は遠くからその来診者たちの顔を望み見た。最初に來た人の方にむきなおると、患者たちをつぎつぎに指差して、その病氣をこっそりと言った。患者たちが皆主人の前に座つてその病状を述べると、一つも当たっていないものがなかった。しばらくすると、主人が待つていた客がやつてきた。安倍晴明の息子である吉平であつた。主人がかれのために杯酒を設けた。まず酒杯を手にして飲まなかつた。吉平が「急いで飲みましょう。もうすぐ地震が起きます。杯がくつがえつたら惜しいのです」と言った。主人はこれを冗談だと思つて、ゆつたりとして飲んでいなかった。やがて、地震が起こつて、杯の酒はとうとうくつがえつてこぼれてしまった。二人とも優れた腕前の持ち主だつ

た。その人はひどく驚いて、世間の人々にこの話を語り伝えた。

〔原注〕

① 一云、客即有行也。

〔書き下し文〕

① 一に云ふ、客即ち有行なりと。

〔訳文〕

① 一説には、客は有行のことであるという。

〔語釈〕

太醫 官名。皇帝・皇室の侍医。ここでは、丹波雅忠は嘗て後冷泉天皇

の病を治療し、権医博士であつたため太医と呼んだか。

丹波忠 丹波雅忠。一〇二一―一〇八八。丹波忠明の子。平安時代中期の医師。権医博士・丹波守・典薬頭・施薬院使などをつとめた。永承七年（一〇五二）後冷泉天皇の病を治療し、さらに関白藤原頼通の病をなおした。名声は海外にもきこえ、日本の扁鵲と称せられたという。著作に『医心方拾遺』『医略抄』などがある。

安晴明 安倍晴明。九二一―一〇〇五。平安中期の陰陽師。識神を用いてよく異変を予知したといわれ、伝説が多い。「三国相伝陰陽輶轄簠簋内伝金鳥玉兔集」を著す。

吉平 安倍吉平。平安中期の陰陽師。安倍晴明の子。九五四―一〇二六。正暦二年（九九二）に陰陽博士となり、穀倉院別当・主計助などを經て、長和五年（一〇一六）に従四位下とな

り、治安元年（二〇二二）十一月にはさらに従四位上に進んだ。三十余年にわたって歴代天皇や藤原道長以下の諸家のために占や陰陽道の諸祭・諸儀に従事し、父晴明のあとを継いで縦横に活躍した。

有行 安倍有行。生没年未詳。陰陽師。従四位下。天喜三年（二〇五五）従五位下で陰陽権助に任ぜられる。承暦四年（二〇八〇）天文密奏を進む。永保三年（二〇八三）にも陰陽師となる。安倍晴明より四代目。

〔典拠〕

『今鏡』第九―「かしこきみちみち」。

『古今著聞集』巻第七―「術道」第九「陰陽師吉平地震を予知する事」（第二九六話）。

〔備考〕

『古今著聞集』には、丹波雅忠が遠くから診察する部分がない。地震を予言する人物については、『今鏡』には、安倍晴明の曾孫である安倍有行とし、『古今著聞集』では安倍晴明の息子である安倍吉平とする。雅忠は吉平の没年である万寿三年（二〇二六）には六歳にしかなくなっていないため、その後の晴明の曾孫である安倍有行になるべきと考えられる。

（趙 倩倩）